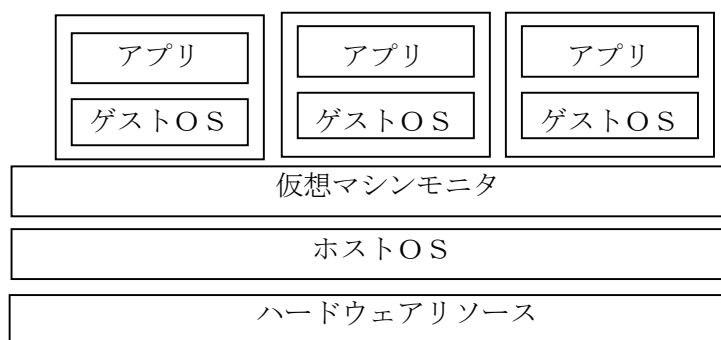


混沌とした中から

仮想サーバ (3)

OS上で別のOSを稼働させる環境を仮想環境といいますが（なんだか表現がわかりにくいですが、なぜこのような表現をするのかは後を読めばわかります）、仮想環境（仮想マシンモニタ）にはクライアント側であるWindows 98などのOSが動く仮想PCソフトとサーバOSであるWindows NTなどが動く仮想サーバソフトがあります。今回は仮想サーバが中心なのですが、その前に仮想PCのソフトについてちょっと取り上げます。その前に仮想PC（サーバもそうですが）には普通動作する基盤となるホストOS（ホストOSを必要としないものもあります）と仮想環境を構築する仮想マシンモニタとその上で動作するゲストOSに分けることができます。



主なものとしては「Microsoft Virtual PC」と「VMware Workstation」、「Parallels Desktop」が有ります。このうちParallels DesktopはホストOSであるMac OS X上に仮想PC環境を構築してWindowsやLinuxなどの動作を可能にするもので、Mac OS Xで作業しながら別のOSを起動して利用できるものでホストOSやゲストOS上のアプリケーションのデータの共有、カット&ペーストも可能です。動作環境としてはIntelのCPU搭載機で、ゲストOSはWindowsは3.1からXP、Server2003、NTのほか、Linux、OS/2、MS-DOSなどが使えます。次にVMware Workstationですが、この仮想マシンモニタの場合のホストOSはWindows2000以上で、ゲストOSはMS-DOSおよびWindows3.1以降のWindowsOSと各種LinuxとNetwareなどを複数動作させることができます。最後にVirtualPCですが、これはもともとConnectix社がMacintosh向けに開発し、WindowsやOS/2に移植したものをMicrosoftが部門もと買取したもので、Microsoft Virtual PCとして無償提供されているものです。ちなみにParallels DesktopとVMware Workstationは有償で提供されています。Virtual PCの最新バージョンはVirtual PC 2007で、Windows Vista EnterpriseとVista Ultimateに標準装備されたもので、その後一般にも無償提供されました。これらの仮想マシンモニタの場合、ハードウェアとしてのPC環境を仮想的に構築（エミュレートする）しているため、かなりの高速PCであっても動作の面ではどうしても遅さが目立ってしまいます。特にビデオチップをCPUでエミュレートしているため高度なグラフィック機能を要求する3Dゲームゲームなどの場合はほとんど使い物になりません。クライアント用の仮想マシンモニタは、古いOSを動かす場合とVistaなどの新しいOSの動作確認にも利用されます。（次回に続く）

(今週の情報誌から)

○日経エレクトロニクス 5月7日号

特集 組み込みセキュリティー待ったなし!

→これまで悪質なマルウェアはパソコンが中心であった。しかし、いわゆるデジタル家電が普及し、組み込み機器に対するマルウェアが問題になりそうになって脅威に備えなければならない。待ったなし!

実録 竜王に迫った将棋400年の知恵

→コンピュータ将棋「bonanza」が竜王に迫った。開発したのは棋力11級程度の理論物理化学の助教授。その方法は力任せの全幅探索(全ての手を検討対象にする方法)で過去の良質な棋譜に近いものを良いものとして評価した。これまでの将棋ソフトの作り方からかけ離れたやり方だったのは開発者が将棋の知識に乏しかったから。bonanzaは1秒間に400万局面以上を呼んでいた。

○日経パソコン 5月14日号

特集 エラー&警告メッセージ対処法

→PCを使っているとよく出てくるエラーと警告メッセージ。いつもは適当に使っているが本当はどう対処すればいいのか。